

二 比庵随筆 笠岡関連

(1) 笠岡高等女学校での歌の話

下野短歌（のちの窓日）昭和二十一年七月号

比庵はまだ疎開先の笠岡在住だった。

笠岡高等女学校で一週一度歌の話をしている。小生は女学生に歌を説くに当り最初から所謂歌を作らせずに最初は何に拘わらず三十一文字で言ひ得る練習をさせた。先ず作歌五原則を歌で示した。

- ・歌を作る道外にあらず 多く読み多く作りまた多く直すこと
 - ・よき歌をよくも讀むべし 速歌をはやく作るべし よく讀みはやく作る
 - ・歌はしらべしらべはしらべ よき歌をよく讀み會得するにあるべし
 - ・速歌は精神集中をきびしくす きびしくすればよき歌多し
 - ・よき歌は數作るうちおのづから得るものにして 作らんとして得ず
- 之は作歌道の非常に難しい議論を五首に纏めてしまったことになる。速歌といふのは小生の造語で速く作る心を以って作る歌である。小生は常に歌を作るには時計を見て三十分の間に作るやうにするといふことを主張してゐる。歌といふものは速吟がねうちである。

下野短歌（のちの窓日）昭和二十一年十月号

小生は當地の高等女学校で歌のはなしをするとき、「

「甘い感傷的の歌は女学生の歌のやうなと言はれるほど女学生の歌といふものは感傷的の歌が多い。しかしこれと同時に此年頃の女性は箸がころがっても可笑いといはれるほどよく笑ふものである。すなわち諧謔性をもつてゐるのである。感傷と諧謔とは全く反對のものであるが、亦存外近いところにあるやうにもある。」

と言つて寧ろ女学生の明朗性を保つために諧謔の歌のことを語り、「汗」「裏」といふやうな題で歌を作らせたところ、非常に面白い成績を得て、「汗」の題では「

- ・姉さまの 洋服を譲りうけたるが 汗のにじみし跡が氣になりぬ
- ・訪問に 汗かきばかりは うきものぞ かしこまるほど 汗にじみつゝ
- といふやうな歌、「裏」の題では

- ・書き古りし 兄のノーを裏がえし とじてぞ父はわれに與へぬ
- ・この夏に きたへて顔の 黒くなり 裏か表か わからぬといはれぬ
- といふやうな歌が出て教場を賑はした。勿論かういふ歌ばかりではない。

- ・一にちの 汗によごれし わがころも 洗ひて乾せば 蜻蛉とまりぬ
- ・裏山の 松の梢に 沈みゆく 三日月しやく 風呂をわかしつ

といふやうな歌もあつて女学生の作歌力が以外にすぐれてゐることを思はせたが、先生方も何より驚いてゐられるのは女学生がその作歌に積極的であることらしい。小生はこの積極性が何処から來てゐるかと思へたのであるが、之は諧謔の歌といふものが女学生を開眼させたものと思ふのである。

長歌 女学生に残す（昭和二十一年十一月 東京転居を前に）

歌の種まきておきしが 芽生ゆるやはた枯るゝや

少女らの一生（ひとよ）のさきの長ければ

今は生へずともはや枯れめやも

大恩の笠岡の上の少女らが

花栄えむとまきし歌の種

(2) 城山で會つた女性

駒込だより(窓日) 当時は下野短歌 昭和二十五年十二月号 六十八歳)

当時比庵は東京駒込に居を構え、夏の数か月妹の住む笠岡に滞在した。

小生は毎日海岸へ出でて、その海岸沿いの古城山へ上り山上の稲荷さまの境内を一廻りして帰ってくる、その間四十分、而して小生がその稲荷さまの百二十八の石段を下りて紡績の長塀に沿って歩くところで毎日のやうに会うひとりの女性がある。

この女性はどうも小生にはある思い出の顔である。小生が京大の学生であったとき、親友が京都の有名な芸者の写真の絵葉書を呉れた。それをアルバムに挟んで長く美人にたんのうしていた。それが小生の思い出である。かくして毎朝小生は彼女に会うことを楽しみにして、終には今日も会いたいといふ成心をもつようになった。そうすると妙なものでそれから一向会はなくなった。いろいろ時間を考えて歩いてみるがどうも会はない。今日こそはと十分に予想して山へ上ったらその山でばったり歌友に會つた。

之は今日も駄目と観念して、その友人と山上の宗祇の腰掛石と井ふ、実に宗祇がもし此処へ来たら腰をかけたかと思はれる大きな丸く平たい石に腰をかけて、海上の風景を眺めながら、此処へ二坪

ほどの亭を建てて雅人相会して遊ぶところにしたなど話してしばらくして別れ、例の通り稲荷さまへ廻り百二十八の階段を下りて紡績塀へさしかゝると、丁度向ふから彼女が来るではないか。

之は小生が十五・六分時間の誤算をしてゐたのかと思ひ、翌日はそれを訂正してあるいてみたけれどやはり会はない。茲に至つて漸く小生も天意を悟り、成心をしてこの前の如く無心に散歩することにした。而して或は会ひ或は会はず、九月も追々日を過して東京へ帰るときが近づいた。

朝の散歩の城山の上り口に何か神さまでも祭つてあるやうな小祠が建られてゐてその入口のところ石に蜘蛛を彫つたものが奉納してある。ところで此の頃小生は城山の上の稲荷さまの神主

に毎朝呼び止められてその家でお茶を飲まされるが、その室にも蜘蛛の画が掲げてある。そのわけをたづねると、蜘蛛といふものは吉兆にもよく天井からぶらさがることがあるがその時はまちがひなく何かいゝことがある、それは幾度も自分が経験してゐることでもまちがひはない、といふ。そこで小生が古歌の

「わが背子が 来べき宵なり ささがにの 蜘蛛のふるまひ かねてしるしも」

などといふのはやはり太古からこの国には蜘蛛を吉兆とする伝説があつたのかも知れぬ、といふと大変喜んで、早速その歌を写し取つて曰く「まあ之は迷信といへるかも知れぬが迷信でも吉事の迷信はいゝと思ふ。」

小生は蜘蛛には好意をもつてゐる。夏の夕方軒先に高く巢を張つて、その巢のまん中に逆しまに懸つてゐる大きな蜘蛛は夏の夕の風景として大変面白い。

さて茲で蜘蛛に一役買つて貰つて小生の恋愛隨筆の終結をつける時が来た。或朝その蜘蛛が天井から下りて来たのでさてはこの蜘蛛はいかなる吉事を知らさんとするものであるか考えながら、例の如く朝の散歩に出て城山稲荷さまの百二十八の石段を下りたところばったり彼女に會つた。

いつも彼女に会ふのは紡績会社の長塀のところ、遙に来る彼女を認めながら心に用意をして会ふのであるが、今回は突然であつたので思はずハハと低い声で笑つた。すると彼女も笑ひ返したが、それが稍高い声であつてそれですつかり親しみが加はり、それからあととは会ふ毎にお早うと挨拶するようになった。田舎のこと故、行人が挨拶するといふことは外形的にはさほど珍しいものではない。さて九月六日、小生が笠岡を去つて東京へ帰る前日また彼女に會つたので明日は東京へか減る由を告げておいた。翌日即ち帰京の日には彼女に会ふことは出来なかつた。むろん蜘蛛も天井から下りて来なかつた。

(3) 今立の茶会

笠岡だより(窓日 当時は下野短歌 昭和三十年十一月号 七十三歳)

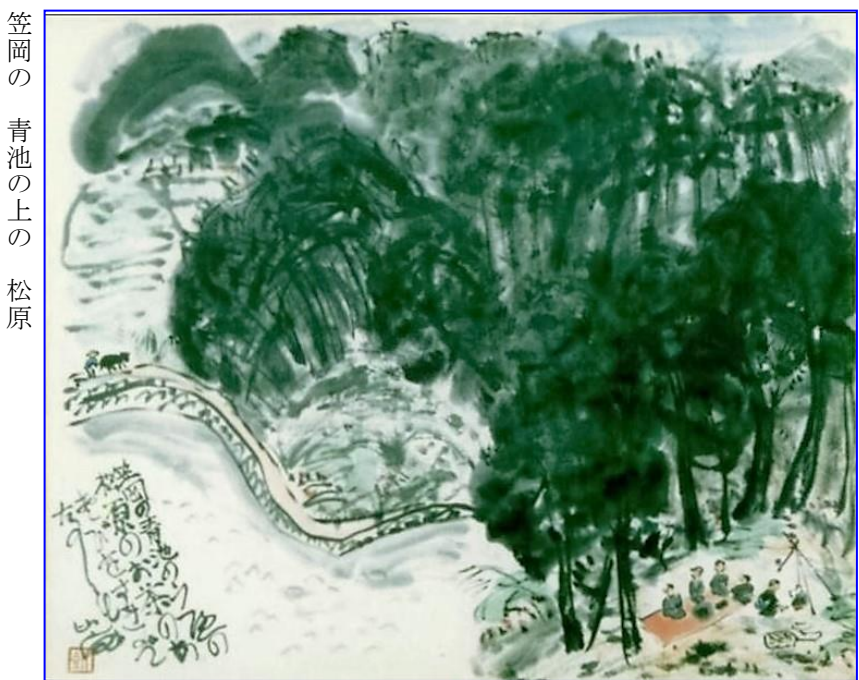
このころは居住地は東京駒込で、夏の数か月妹の住む笠岡に滞在していた

笠岡の茶会に誘はれ、笠岡の町はずれ今立といふところの青池といふ大きな池のほとりの松原のなかで朝早く野点での茶をご馳走になった。そのへんの野草の花、萩や野菊やいたどりや何といふか蔓草の花などを松の木にしばって、之を床の間のかざり付に擬し、又その上方に短冊を吊して之を掛物に見立てる、その歌を小生に書けといふので

今立の 青池の上の 松原の

お茶の遊びを すればたのしも

と書いた。茶の遊びは甚だ愉快なものであったが、興半ばにして空があやしくなり雨が落ちて来たのであわて、物をかたずけて帰ることにした。まことに残念であるが茶人の方では思はぬ雨に會つて興を未完に終らしたといふこともひとつの景色となるのであつてあとに物を残しておく心といふものが亦よいのである。



笠岡の 青池の上の 松原

お茶の遊びをすればたのしも 比庵

(4) 小野竹喬先生

笠岡だより(窓日 当時は下野短歌 昭和三十二年十月号 七十五歳)

小野竹喬先生は京都画壇の頭目、芸術院会員であるが、先生は笠岡の産である。それで笠岡では大変な人気である。笠岡ばかりでなく岡山県に於いても賢人として重んじられてゐる。何か画の方の催しがあると先生を招待する。先生が一わたり画を見て通り、或画の前へ一寸でも立ち止まると、その画は高く売れる。先日先生が久しぶりで帰郷しられたとき小生もちよつと会う機会(竹二会)を得たが、そのとき先生はいつぞやE氏邸でお目にかかったといはれた。ただ一回あつたばかりであるが、そのときのことを記憶して居られた、そおときE氏の小さい室に小生の猫の画が掛けてあつたのを見て竹喬先生は耳がいいねといはれた。小生は耳がよいといはれて驚いた。耳などは少しも力を入れたものではないのに、それがどのようによいかわからなかつた。

先生は此頃京都では行燈型に紙を切つて描くことが流行しだした、といふことを言うはれたので、行燈型とはどういふ形ですか、とたずねたところ、半切を横に半裁したものであつた、といふので、小生は一寸愉快であつた。それは岡山の書画展で小生も新しい形をと考えて半切を横に半裁した紙に画を描いて出したところ、それを見ていた人の中に之は半端ものであると悪口を言った人があつたといふことを聞いていたからである。



竹二会寄書 昭和三十二年

(5) 威徳寺の墓碑

駒込だより (窓日 当時は下野短歌昭和三十二年十二月号 七十五歳)

郷里でTさんが墓を作っておけと言い出した。而して曰く、自分の茶友Nさんにも之をすゝめたがとうく作らずに死んであとで墓を作ってくれるものがない、といふ。小生は墓なんか作ってくれるものがなくても死んだ後に何であらうと思つたが、家内が先に死んでゐるので墓くらい作つてやるのが家内に対する愛情であるといふことを思ひ、それからまた死んだあとに墓を作つて貰はなくてもよいが、生きて居るうちに之を作っておくのも悪くないと思つて、遂に之を作ることにした。さうするとTさんが、歌よみの墓に歌を彫つてないといふことはない、是非歌を彫れといふので、それもそうだと思ひさてどのやうな歌を彫らうかと考えた末

まどかなる 夢を結ぶと いふことの いかのまどけき ものにあるかも

といふ歌を選び之を平仮字で読みやすいやうに書いた。さうすると石工がひどく喜んで、比庵の歌を刻まして貰ふのはありがたいといつて刻んでくれた。かうして墓に歌を刻んで貰つてみると、之自ら歌碑のやうなものともなつて、之は案外よいことになつたと思ふ。

歌碑を建てるなど大げさなことは望まないが、Tさんが云ふやうに歌人である上は自分の墓に一つ歌を刻む位はあたりまへであつてしかもそれが歌碑ともなれば多くの歌人の歌碑よりもよっぽどよくないかと思ふ。

此墓は笠岡の威徳寺といふ禅寺の墓地に建てたが、その和尚さんが此歌を見て大変感心してくれて、之は禅だといふ。

それで小生は語つて曰く、禅なんてことは知らないが、この間金光教のH先生のところまで墓を造つた話をしたら、ウンそれはよい、そうするともう死にさへすればよいのだナアといはれた、といつたら、和尚さん益々感心して誠に達人の語だといった。此和尚さんは曹洞宗ではだいぶん高いところに居る人で説教の名人、山室軍平先生を思はせる流れるやうな語調で縦横に語る、此和尚さん明日は山口へ行くといふ、山口へは総持寺の管長が巡錫してゐるので、それに合流するそうである。此管長は野水会(註 比庵と弟三溪が毎年開いていた作品展で、川合玉堂が賛助出品をした、この年に玉堂が亡くなつたので最後になつた、十五回続いた)を見て下さつたりして小生も知つてゐる人であるが、今年九十一歳になり虫歯が一つ出来た、年が寄ればどうもならぬといはれたといふことで、そこで小生は即詠一首を丹尺に書いて之をことづけけることにした。

尊とさよ 老師は九十一にして 虫歯が一つ 出来たまひしと

これは初句が主眼である。



(6) 笠岡の作歌グループ

笠岡だより（窓日 当時は下野短歌 昭和三十八年十一月号）

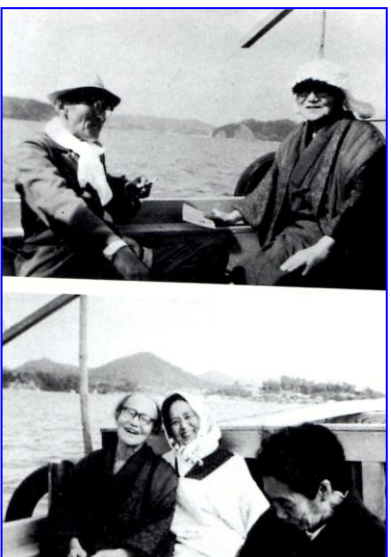
笠岡に滞在中に書いたもの

小生が笠岡で歌を詠む老婦人のグループ（鈴音会）の歌を見てあげるようになってから十数年を経過してゐるが、現在元気な人は僅か三人、その三人が相寄って小生を囲んで何か遊びたいといふので、小生はそれなら海上に舟を浮べて遊ぶことにしやうと言ってそれにきまり、米と野菜と果物を持ち込み、昼飯は舟で炊いて貰ひ、おさいにするだけは舟で魚を釣って食べるといふ趣考で、それからみんなよく知ってゐる秋田君を仲間に加へて舟を出した。食事のことも魚釣りのこともみな舟人が世話をしてくれるので一路波平らかにこのあたり瀬戸内海でも国立公園に属する名勝を眺めつゝ釣場に向ひ、神の島・高島・白石・北木を過ぎて飛島（ひしま）といふ笠岡市で一番遠い島の磯寄りに糸を垂れると小さい魚が次々に糸にかゝる。元来小生の糸にはどうも魚がかゝらない常例であるが、今日は魚が小さく無邪気であつて小生の糸にも時々かすかな手ごたへがあつて、糸を引くと白玉の魚は小さく水を離れる。

小さな魚のかゝれり うべなりや われには小さき 魚のかゝれり
他の人の 釣るより小さき 魚なれど われにも釣れて 面白きかも

かやうなところが小生の身上であつて、人には勝てないが負け方に楽しみがある。若いときはではならぬかもしれぬが、年が寄ると之がよい。

舟あそび



笠岡だより（窓日 当時は下野短歌 昭和三十八年十二月号）

笠岡に滞在中

先に記載した舟遊びが面白かったので、今度は中秋名月を観る会を小生の宅で開いた。

十月二日が

この名月の日に当つたが、この日は右の三人の中お花の先生をしてゐる塩飽香代野さんに差支へがあつて、一日遅らせ十月三日十六夜の月を賞することにした。

十月二日の名月は近年稀な月であつたので翌日はどうかしらんと心配したが、翌日も前日に劣らぬ晴天で、この日はゲストに前の舟遊でも招いた秋田君と書家の浅野清子さんと、浅野さんに書を、又塩飽さんに花を習つてゐる長田静江さんと、常連の柳生春乃さん仁科秀子さん、それか

ら終戦前後小生が笠岡へ疎開してゐたとき、笠岡の女学校で歌を指導したことがあるそのときの生徒で、今は家庭の主婦、地方の婦人会の中心になつてゐるSさんなどを加へて賑かに談笑しながら歌を作つた。

この歌会では互選などせず、作つた歌を順次に作者に読上げて貰ひそれを直ちに小生が批評添削し、よいところはみんなで賞めあふといふやり方で、そのほめあひは仲々賑かで結構楽しめるものである。一天雲もなく澄み極まつた月はどう表現したらよいかといふ話になり、秋田君は之を「空しきまでに」といつてゐるし、柳生さんは「淋しきほどの」といつてゐるのは皆聞くべきであると小生はいつた。

この席でお花の塩飽さんは小原流県下大会で優勝した話をして、華道もこの頃は昔のやうに、只花を形よく活けるといふだけでは通らず、その上に心象を写すといふことが重んじられ、単に美しく咲いた花ばかりでなく、いろいろの材料を寄せて一つの景色を作り、それにテーマを与へて、果してそのテーマが表現しられてゐるかどうかを見て貰ふことになつてゐる。自分はこの大会で、材料として自分の家の藪の中の若竹の枯れたもの、それから百姓がもつてゐた向日葵の種の頗る大きなもの、之に青い竹の枝と菊の花とを添へて、藪の下道といふテーマでアレンジした。それが優勝したのであるが、斯の如く心象を写すといふやうなことになる、自分で歌を勉強してゐることが非常に役に立つてゐると確信するので、今夜はその礼を述べたい積りでこの話をすゝむ、といふことで、どうも之はなかなか示唆に富んだことをいはれたものと小生は感心した。

華道でこの頃訳のわからぬものを作ると小生は予て思つてゐたが、之はテーマによつてアレンジしられたものとするとその味ひ方がわかるやうである。この頃は華道に限らず、画でも歌でもやはり同じやうなテーマ作品があつて、このテーマ作品といふものが抽象作品に通じるやうである。

(7) 妹岡本章子 (ゆきこ) 逝く

駒込だより (窓日) 当時は下野短歌 昭和四十年十月号)

八月五日午前零時三十七分わが親愛なる郷里の妹岡本章子を亡った。彼女は歌をよく詠み字をよく書いた。殊に字は彼女独特の筆意があつて、彼女を知っている書家が一樣に之を称へ、彼女の師であつて頗るやかましいといふ評判のU先生も、彼女の書だけは特別だとしていたものである。

或時外池さんも彼女の書の方が小生の書よりうまいといったことがあつたが、之は一寸反抗の形で話題を作つた話術でもあつたと思ふが、半分はその本心をいったものと思はれた。といふのは小生も多少同じやうな考へをもつてゐるからである。尚いつてみれば小生と彼女の差は、小生には変化があり彼女には比較的それが無かつたといふだけのことである。

このやうな彼女であつたが彼女は生まれながらの田舎者でとても自分の作品を人に見せることを厭つて、そのやうな機会があつても極度に之を拒んだ。ただ一度小生が玉堂先生に見て貰へといつた時だけは眼をかがやかせて喜び

をかもみちも 今を盛りと さく桃の 山のたをりは さらに色こく

といふ歌を書いて出した。それを先生にお目にかけると非常に驚かれ誠にうつくしいとしばらく見てをられたが、筆を執つて之に桃花林の風景を描き添へ、比庵先生の妹さんなら定めて美人であらうと言はれた。美人であらうといふ想像は当らないが、玉堂先生が心から妹の作品をほめ快く画をいれて下さつたことは間違いない。それから毎年一回妹は作品を先生に送り、先生はそれを見て楽しむ如く顔を綻ばして画を入れて下されこれが数回続いて先生は亡くなられたが、妹はこの先生との合作を無上の光榮とし喜びとした。それで妹の葬儀のとき代表として弔辞を述べたN君は妹の芸術は周囲の人の外あまり世間に知られてゐなかつたけれど、川合玉堂先生と合作の出来る程のものであつた、と述べて会衆を得心させたものであつた。

註 章子の死後その歌集が出版されたが、その題名は玉堂との初合作となつた歌の初句

「をかもみちも」になつている。

妹は上述の如く自分のPRについては極端に恥ずかしかつてゐたけれど、自然に周囲の人々には尊敬しられ幸福に生活したと言へるのであつたが、その反面家庭的には子供が無く主人とは気が合はず死床に在つて尚融合することが出来なくて、この儘離婚して貰ひたいと訴へたが、そのやうにもならず結局分骨して墓を別に小生の墓地内に設けることにした。

その墓石に小生は

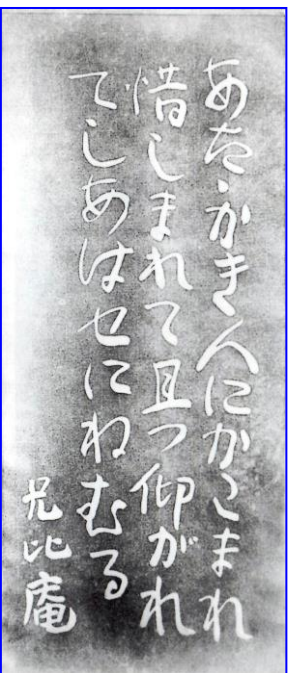
あたたかき 人にかこまれ 惜しまれて 且つ仰がれて しばわせに眠る

といふ歌を刻んでやることにした。

郷里の俳人N君が妹の死を悼み電報で弔句をよこした。

星空の すずしさを恋ひ ゆかれしか

之は死を美化した逆の表現を用ゐて一層深い心を寄せたものであつて、今は小生もこのやうな心になつて妹の死を見送るべきであらう。



駒込だより(窓日 当時は下野短歌 昭和四十三年一月号)

妹の遺歌集「をかもみちも」がこの程出来た。小生が装幀した。妹は歌と書は或るレベルに達して美しいものであった。秋田秋良君はこの歌集を貰ひ帰る途で川の土手へ座り読み出したら、正午過ぎから日の沈むまで思はず読み耽ったといっている。

妹は自分の作品についてはえらい遠慮してゐたが、川合玉堂先生に認められ、先生は快くその作品に画を入れて下され、それを東京の作品展に出してみたら忽ち売れてしまったものであった。妹の歌は此頃の歌壇で歓迎しられるやうなむづかしい文学ではないが、ひとりの老いて平安に暮らしてゐる女のその平安な心を、素直に花木自然に託して詠み上げ、一首一首吟味したもの、歌の歩道を正しく歩きゆく姿である。

書は中年から習ったものであるが、朝四時に起きて一年有半習ひ通したと言っていた。割合短い時間と思ふが、勝気な女として一生けんめいであつたと思ふ。小生の妻は親譲り天性の能書であつたが、妹の字の変つたのを見て大いに驚き、之はどうも負けてしまったと言つてゐた。

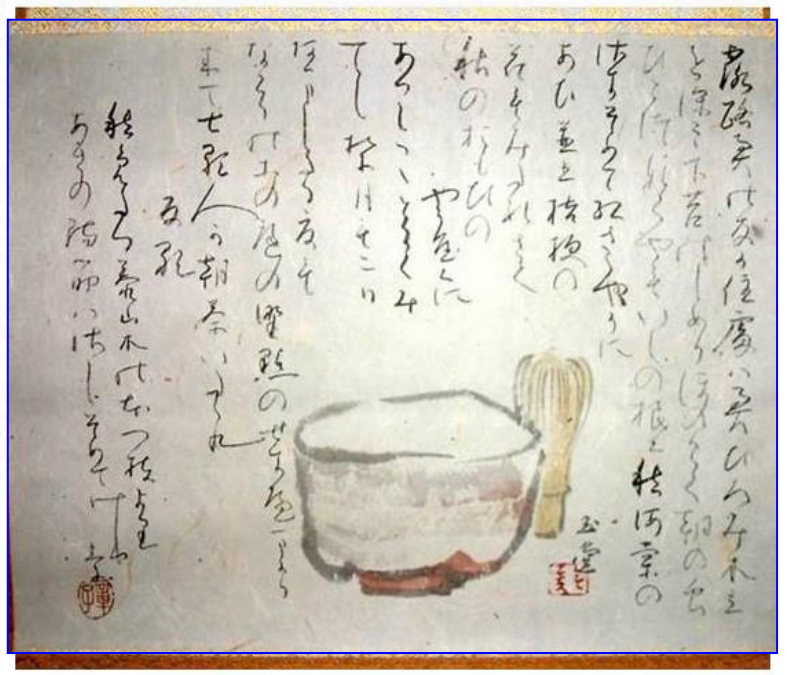
比庵と章子

笠岡の章子宅にて 昭和二十九年



本別邸にて 39 10 20

川合玉堂と章子の合作



茶事 画 川合玉堂 歌 岡本章子

露路奥の友が住処は 奥ひろみ 木立を深み 下苔の
しめりほのけく 朝のむし ひとつなぎある いしの根に
秋海棠も 咲きそめて 紅きややかに あひ並び 桔梗の花も
乱れさく 秋のすがたの やうやくに 暑し暑しと にくみてし
葉月も二日 あましたる 夏もなごりの この庭の 野点の席へ
まかりきて 七歌人が 朝茶いたゞく



玉葱と唐辛子 画 比庵 歌 岡本章

こはる日の
ひさしむく
垣の木に
ざるや飯ひ
かけならぶ

「反歌 秋めたつ 泰山木の ほつ枝より
あさの陽筋は さしそめてけり

(8) 城山の歌碑

笠岡日より(窓日 当時は下野短歌 昭和三十七年九・十二月号)

歌碑建立のこともあり、十一月まで笠岡に滞在していた。 八十歳

九月号

笠岡城山(公園)に小生の歌碑が建つことになった。小生はどうも諸方へ迷惑をかけてすまないからと断ったのであるが、之は盛上った要望であるからだまって来てくれといふことで、数名の有力者が、足りない部分はいくらでも割当ててくれといふ黙約があつて非常に楽な気持で資金が集まった。石は土地の石を用ゐてもらひたいといふ小生の希望にて笠岡は聞ゆる花崗石の産地(北木島の産)であるところから、その花崗石の紅水晶と呼ばれるほんのりと紅をさした最上の石の非常に形のよいものを選ばれ、それへじかに歌を書くことにした。

画仙全紙へ一杯に書くのと丁度それへはまるやうになるので、日光の歌碑より一まはり大きなものとなる。日光の歌碑はやはり日光の自然石で川原へころがつてゐたものだが、誠に形のよい歌碑が出来た。笠岡の石は大きな花崗岩から切出したものであるが、その割れ方が丁度日光の自然石のやうな形になっていて、割れ目が生々しいなりにそれが変つた景色になっている。

さてこの石へ書く歌

城山の 上の廣場に たゞ射せる 朝日より見る 海のある町

といふのを、土地の歌人秋田氏に書いて送り、この歌はどうであらうと相談したところ、この歌もよいが、比庵には城山の上で詠んだもつとよい歌がたくさんあるように記憶するがどうであらう、といふ返事であつた。

各歌の自選といふものは容易のやうでなかなかむづかしいもので、かつて自選百人一首といふものが何かで発表されたが殆んどよい歌がなかった。それほどむづかしいものであるが、それでも作者には作者だけの理由があるので、このやうな歌こそ研究して面白いものと思ふ。この小生の歌碑の歌にしても、四句の「朝日より見る」がこの歌の支へとなつてゐるので、之は小生としては新しい語法で、小生はこの一句に全力を注いでをる。笠岡を描写しては「海のある町」とだけ誠に粗描で表はしてゐるが、この「朝日より見る」が詞の外に働いてゐるやうに自分では思つてゐる。

小生は常にいつてゐることで、歌は一句に全力を注ぎ他は寧ろ平凡な方がよい。その一つの例としてこの歌碑の歌を提供するつもりで、秋田君の手紙もあるけれど、歌碑の歌はこれに定めてをる。

十二月号

十月七日笠岡城山公園広場に「建設しられた小生の歌碑除幕式があつた。市長始め当地方の知名人が多く列席して下さつたのは寧ろ意外であつた。市長の祝辞は前日に書芸公論や「をだまき」に小生のことを書いてあるものを読んで勉強しられた由で誠に「要領を得て言ふところを心得たよい祝辞であつた。それからわざわざ神戸より来て下さつた書芸公論の桑田先生」、岡山大学の大本先生等々各々各々よいことを言つて下され、一つも空々しいお世辞といふものはなく、何か事実に基づいて比庵の一半を語るといふやうなものになつて非常に気がきいてゐた。

この歌碑は「小生の八十賀といふ意味もあつて小生は市長から赤い頭巾と陣羽織を渡され、それを着て答辞に立つたのであつたが此歌碑の出来るいきさつが全く日光の場合と同じであつたので、そのことを言ひ、実は日光で除幕式のときの答辞には、棟上げの餅拾ひの話をしたのであるが、それは、母親が子供に言つて聞かせるには、餅の方を見ないで自分の足元を見てをれ、」足元へ餅がころんで来たならそれを拾へ、と言つたといふので、自分は実にその足許の餅を拾つたわけであると

言ったが笠岡でもこれは同じことで、小生は足許の餅を拾ったやうな気持であると、茲のところは簡単に述べておいて、それからこの歌碑を説明した。

城山の 上の廣場に たゞ射せる 朝日より見る 海のある町

といふ歌は今除幕式をしてをる城山の上から眺めた光景であるが、海のある町といっても町は見えない、海だけ見える、それでよいのであって、「朝日より見る」はこの海だけに係って、「朝日より見る海」その海のある町といふ意味になる。ところが今見える海は遠からぬうち埋立てる計画になってゐて、海は変じて町となるといふ笠岡発展の物語りとなるのであるが、さうなつた暁にはこの歌碑の歌も共に発展するのであって、その場合は「朝日より見る」は海だけに係らないで「海のある町」へ係るのである。即ち此歌は笠岡の発展に俟うて歌も発展するといふ不思議な歌であると、

一寸諧謔を交へて、近いうちに環境が変化することに対面して予防的説明を加へておいた。

笠岡の歌碑が日光の歌碑と甚だ異なる一事がある。それは日光の歌碑は歌人の力を中心として出来たものであるが、笠岡の歌碑は歌人よりも寧ろ書家に縁が深いといふことである。それで除幕式の時も書家は大阪、神戸、西宮といふ遠方から地元近隣を加へて多数に上つたが歌人はひっそりと二三人が座に付いて居たばかりであった。しかしその歌人の一人が歌碑の歌を指して「朝日より見る」が急所だねといったのは嬉しかった。之はさすがに歌人だと思った。

註 文中の日光歌碑は数ある比庵の歌碑類のなかで最初に作られたもので、昭和三十四年に前年同市の名誉市民に推戴されたのを機会に幾多の功績を称え、その香高き詩情を長くとどめようとして有志により同市の公民館前に建設された。現在は同市二荒山神社境内にある。

春風の 二荒のやまは おほらかに

雲井にそびえ またはかくるゝ 清水 秀

追記 城山の歌碑のその後 清水 固(比庵の孫)

城山の歌碑は平成二十八年現在建立から五十四年経つが、この間のトピックスは次の通り

- ①歌碑の草稿発見(平成二十五年 2013年)
- ②歌碑のお化粧直し(平成26年 2014年)

草稿発見の地元新聞記事



草木に囲まれた歌碑(下)を地元美術商豊池氏が清掃して下さった。(上)

